

双葉町埋蔵文化財調査報告

第 1 集

宇津棟遺跡

—縄文時代中期の住居址—

団体営園場整備事業（笠石地区）に判う山梨県
北巨摩郡双葉町宇津谷字宇津棟遺跡調査報告書

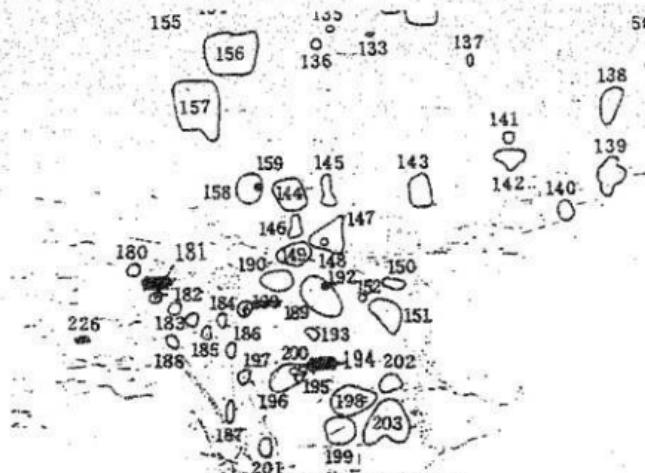
1984

双葉町教育委員会

正 誤 表

直 目次	行	誤	正
3	27	3	13
3	8	Pm-1、始良Tn	P-1、良T
4	21	一部試験	一部試掘
7	137	水上395-1	水上395-3
9	200	100種物範屋古墳	200種物範屋古墳
10	221	上野山2690	上野山269
10	221	221椿城跡	222椿城跡
13	18	光明廟	光明
13	19	不明ある	不明である
13	24	屋根上	屋根上
13	31	高き	高さ
14	7	ヤシャブシヤ	ヤシャブシ
14	8	判官ナ者	判官ナル者

図中の番号変更



序 文

双葉町は県都甲府市より西方約10km、北巨摩郡の最南端で茅ヶ岳南麓斜面が甲府盆地と接する位置にあり、面積19.25km²、近年茅ヶ岳広域農道、中央自動車道の開通などで都市化の波が押し寄せ、甲府市のベットタウンとして人口増加の傾向にあります。

本町には国の重要文化財薬師堂をはじめ多数の文化財、包蔵地があり町民の文化財に対する関心もいよいよ高まってきております。今回の発掘調査は双葉町宇津棟遺跡で縄文時代中期の住居址が出土し先住民の文化、生活様式を学ぶのに貴重な資料となりました。広く町民にも歴史の一端を伝えより理解を深めていきたいと思います。

発掘調査に際しご指導下さいました山梨県教育委員会文化課のかたがた、作業にお手伝い下さいましたみなさまがたに心から深謝申し上げる次第です。

昭和59年3月

双葉町教育委員会

教育長 輿石鉄也

例　　言

1. 本報告書は、団体営園場整備事業（笠石地区）に伴う宇津棟遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺跡は、山梨県北巨摩郡双葉町宇津谷字宇津棟に所在した。
3. 発掘調査から報告書作成は双葉町教育委員会が主体となって実施し、現場は野田昭人（国学院大学文学部史学科考古学専攻卒業）が行った。
4. 本書の作成のための整理、実測、トレイス、図版の作成及び写真撮影、本書の編集は、野田昭人が行った。
5. 遺物及び実測図は、双葉町教育委員会が保管している。
6. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、次の先生に御指導、御助言をいただいた。御芳名を記して感謝したい。
末木 健・八巻 奥志夫（山梨県教育委員会文化課）
7. 本発掘調査は昭和57年度国庫補助企並びに県費補助金を受けて実施した。

宇津棟遺跡調査組織

1. 調査主体者 双葉町教育委員会
2. 調査担当者 野田昭人（国学院大学卒）
3. 調査参加者 佐野一市　齊藤直吉　齊藤りつ子　佐野秀子
保坂千鶴子　小林潤生　飯室貞江　飯室可ね子
保坂けさの　柿津初江
4. 事務局 双葉町教育委員会（教育長、興石鉄也、花田茂美）

目 次

I. 調査の経過.....	1
II. 遺跡の環境.....	1
III. 層序.....	2
IV. 遺構と遺物.....	2
(1) 第1号住居址.....	2
(2) 第1号土塁.....	3
V. まとめ.....	3
VI. 図判.....	4 ~ 11

I 調査の経過

近年、本県の北巨摩地方は、圃場整備事業によって田畠の景観を大きく変化させようとしている。本町においても宇津棟地区がその対象となり、昭和57年、58年度の計画で整備されることとなった。しかしながら、対象となった宇津棟地区の南には、宇津棟遺跡が立地し、その事前対策がせられた。宇津棟遺跡は、縄文時代の遺跡としてよく知られており、整備対象地区からも数点の土器片、石器類が表面採集されており、事前調査の必要性が認められた。こうした状況において、双葉町教育委員会では、県文化課の指導を受り、事前調査を実施することになった。

調査の対象となったのは、宇津棟遺跡の北端、地番2257～2262（第1図、第2図）の地区である。調査に際しこの地区をA地区と呼称することとした。

A地区の調査は、昭和57年11月12日より開始した。総計15本のトレンチを設定し、調査を進めた。（第2図）その結果、縄文土器片数点を発見したにすぎず、遺構は確認されなかった。故に宇津棟遺跡の範囲は、A地区までは至らず、その上段である標高390m以上の台地上にあるのではないかと推定される。この地区的調査は、昭和57年11月20日をもって終了した。

さらに、A地区と一つ沢をへだてた北側の整備対象区も調査の必要性が認められたため発掘調査を実施することとなった。調査は、昭和57年11月24日より開始した。まず、遺構の確認を主目的とするためそれぞれの田畠に1ないし2ヶ所の2m×2mのグリッドを設定し、調査を進めた。（第2図）その結果、2372地区より縄文時代中期後半の住居址一軒と土塙一基が検出された。（第4図）その他のグリッドからは、遺物等の出土はなく、この地区的調査を進め、昭和57年12月11日において調査を終了した。

遺構が確認された2372地区を、宇津棟遺跡の北に位置することから宇津棟北遺跡と呼称することとした。

II 遺跡の環境

宇津棟北遺跡は、甲府盆地の西、茅ヶ岳南麓の台地上に立地する。（第1図）この台地は、茅ヶ岳火砕流によって形成されたとされており、台地の南端には、円丘状の流れ山地形がいくつかみられる。さらにこの台地は、南流する河川によっていくつかに分断されている。遺跡の立地する台地も、東を東川によって、西を六反川によって分断されている。これらの河川は、台地を開拓しながら南流し深い谷を形成している。遺跡からは、八ヶ岳、富士山、南アルプスの峰々を望むことができ、ひじょうに眺望がよい。しかし、冬場は通称“八ヶ岳おろし”的

りみちとなり、寒風ふきすさぶ所となる。遺跡の周辺には、小さな沢をへだてた南の台地に宇津棟遺跡が、西に孤石遺跡が立地する。いずれも縄文時代の遺跡としてよく知られている。

調査区の現況は、ほとんどが水田であり、一部桑園もあるが、それらもかつて水田として耕作されていたものである。

III 層序

本遺跡の層序は、トレンチの観察によると第Ⅰ層、耕作土、第Ⅱ層、赤褐色土層(水田底土)、第Ⅲ層、褐色砂礫層、第Ⅳ層、黄褐色火山灰土層の順に堆積している。

第1号住居址、第1号土塙は、第Ⅲ層中に構築されており現地表面からの深さは、わずかに30cm程である。しかも水田底土からわずかに10cm程下位が遺構確認面であり、水田構築による遺構の破壊が夥しいことが窺える。故に、遺構の残存状態はひじょうに悪く、出土遺物もろく、磨滅したものが多かった。

IV 遺構と遺物

(1) 第1号住居址(第4図)

本址は、第Ⅲ層、褐色砂礫層中に構築されていたため、炉の検出をもってはじめて確認した。そのため、貼床の一部が検出されただけで竪穴の壁、柱穴等は、検出することができなかった。これらは、水田構築に際して破壊された部分が多いと考えられる。

炉址は、1m×20cm×80cm程の右開い炉である。(第5図)主軸は、北西～南東方向にあり、5つの炉石が残存していた。北東及び南西方向の炉石は、ぬかれていた。焼上は、あまり多くは検出されなかった。炉址上からは、第6図1の土器が、また、炉内からは、石錐が1点出土している。

出土遺物(第6図)

本址からは、縄文時代中期後半の土器が出土したほか、石錐、石皿が1点づつ出土している。土器は、ほとんどが破片であり、胎土もろく、発掘後の洗浄によって文様が剥離してしまうものが多かった。そのため文様の判別できるものだけ第6図に示した。

1は、炉址上から出土したもので、甕の口縁部片である。口縁部は、無文帶となり、頸部には横位の蛇行する隆線文が貼付されている。さらに、その下位に三条の沈線が施される。

2も口縁部片であるが、口縁は波状を呈し、口縁ぎわに蛇行する隆線文が貼付され、そこからさらに蛇行する懸垂文が垂下する。

3～5は、胴部片である。やはり横位の蛇行する隆線が貼付される。4は、さらにそこから懸垂文が垂下し、5は上下に沈線が施される。いずれも縄文を地文とする。

6は、条線文を地文とし、蛇行する懸垂文と2本の隆線が垂下する。

7～9には、渦巻文をもつ胴部片である。

10、11は、重弧文を施す。口縁部片であると考えられ、10には蛇行する隆線が貼付されている。

14～25は、同一個体であると考えられるが、磨滅が著しく接合不可能であった。所謂重弧文土器である。14～16は、口縁部片である。17～25は胴部片で、半截竹管による平行沈線文、円形文、蛇行する隆線文が組み合されている。

以上が第1号住居址より出土した土器の主たるものである。これらは、いずれも曾利II式土器の特徴をそなえているものであると考えられる。

(2) 第1号土塙(第4図)

本址は、第1号住居址調査中に確認されたものである。当初、第1号住居址に伴う柱穴ではないかと考えたが、本址内よりハの字状文をもつ土器の底部片が出土したため、土塙とした。1m30cm×80cm程の円形を呈すものが2つ連結している。確認面からの深さは、最深部で30cm程である。

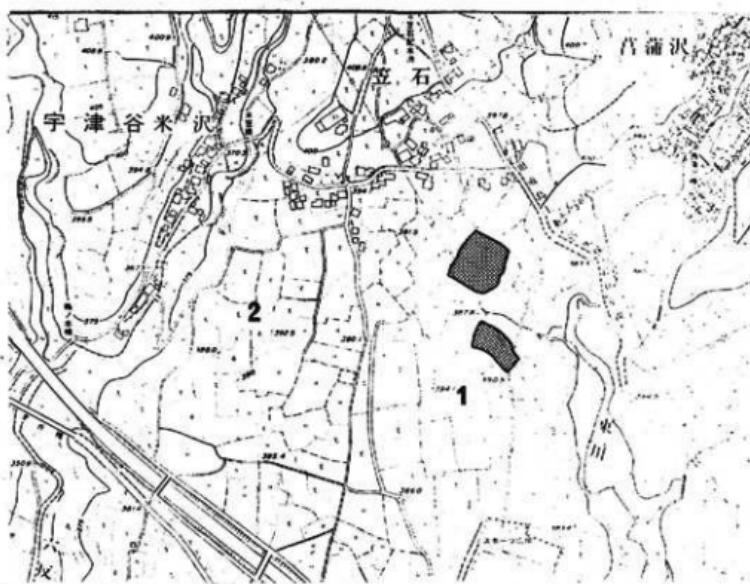
出土遺物

本址からは、ハの字状文をもつ土器の底部片が出土したが、胎土がもろく、発掘後の洪淨で文様が消滅してしまい図示できなかった。

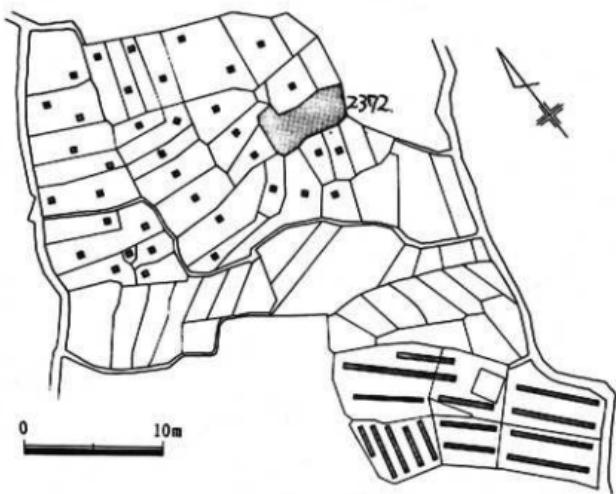
時期は、曾利V式期のものであると考えられる。

V ま と め

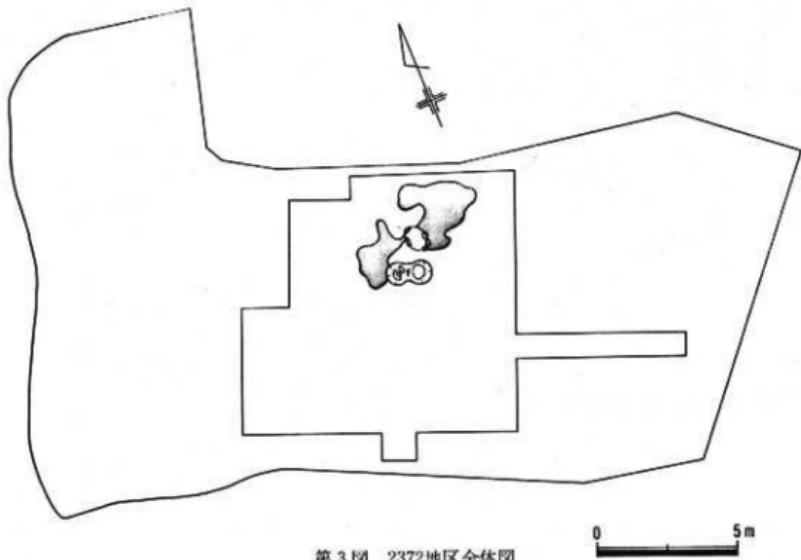
今回の調査によって得られた資料は、わずかに縄文時代中期後半の住居址一軒と土塙一基である。しかもその残存状態はひじょうに悪いものであった。しかしながらこうしたささやかな資料ではあるが、本地域においては、貴重な資料となるものであると考える。



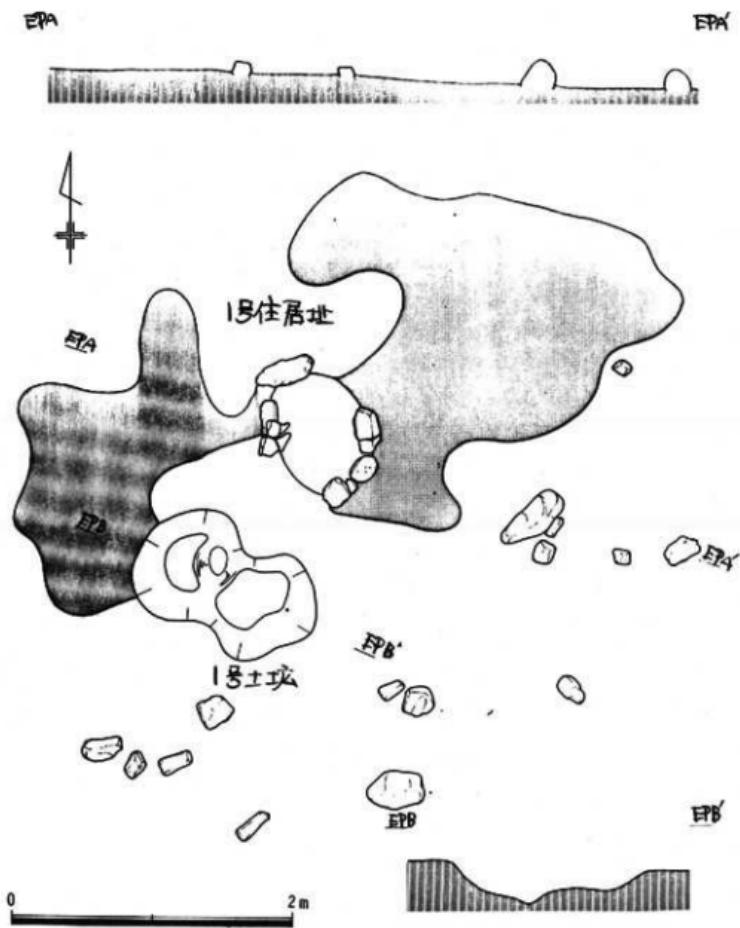
第1図 調査区位置 1. 宇津棟遺跡
2. 狐石遺跡



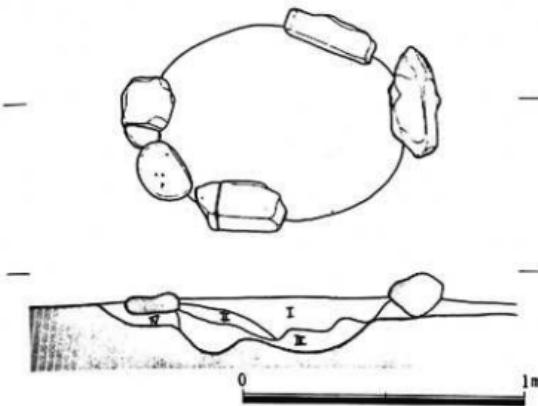
第2図 調査区全体図



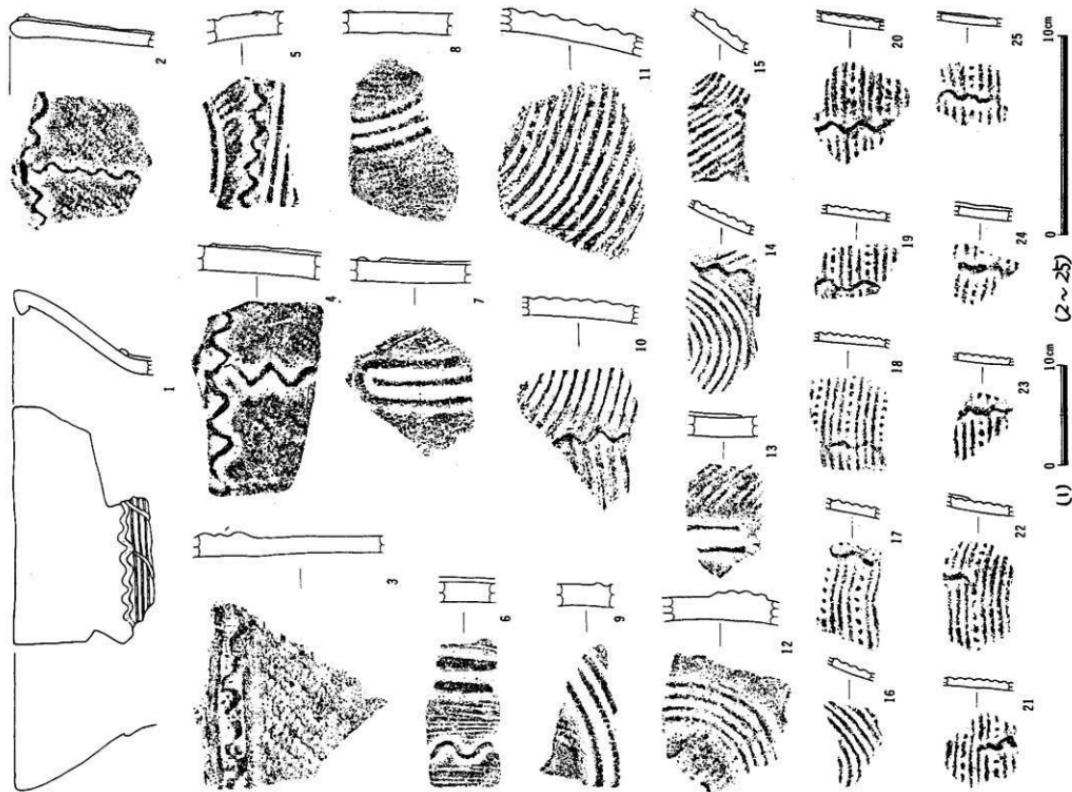
第3図 2372地区全体図



第4図 第1号住居址、第1号土塚平面図



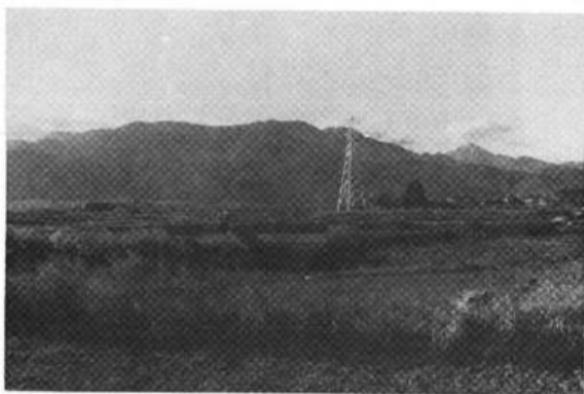
第5図 第1号住居址炉址平面図、セクション図



第6図 第1号住居址出土土器



A区遠景（北より）



北遺跡遠景（南より）



1号住居址



1号住居址
炉址



1号土块

